



日本の探偵小説の始まり

探偵小説到来以前の日本では、南町奉行大岡忠相の活躍を描いた『大岡政談』などの裁判小説が広く読まれていた。

また、犯罪を犯した女性の生涯を読み物にした「毒婦もの」、盗賊を主役とした「白浪もの」などの実録犯罪譚が新聞に連載され人気を博していた。このような土壌が探偵小説の受容を容易とした。

黒岩涙香は、明治21（1888）年『都新聞』にイギリスの作家ヒュー・コンウェイの原作を元にして、内容や人名を日本風にした翻案小説『法廷の美人』を連載し大成功を収めた。この成功を受け、次々と作品を発表し、「探偵小説の父」と称された。これに倣う翻訳も増え、明治20年代に探偵小説ブームが巻き起こった。『モルグ街の殺人』は明治20年、饗庭篁村によって『読売新聞』に掲載された。ホームズ作品では『唇のねじれた男』が、イギリスで発表された3年後の明治27年に訳者不明『乞食道楽』として『日本人』誌に掲載されている。

明治22年に涙香が創作探偵小説『無惨』を発表すると、次第に日本人の創作探

偵小説も増えていった。涙香は『都新聞』を退社し、明治25年『萬朝報』を立ち上げた。涙香小説という目玉を失った『都新聞』は、その穴埋めとして実際の犯罪記録をもとにした『探偵叢話』を開始し、これが好評を博した。他紙も追随し、「探偵実話」というジャンルの流行が日露戦争頃まで続いた。

探偵小説のブームにおされて、文豪たちも探偵小説に手を染めている。幸田露伴は明治22年『是は是は』『あやしやな』を書いた。

また、それまで純文学中心であった春陽堂の依頼で、探偵小説シリーズを尾崎紅葉率いる硯友社が引き受け、泉鏡花が『活人形』を書いている。



企画展示 探偵小説の系譜 <日本編>

大正～乱歩登場

明治末から大正の初めにかけて、谷崎潤一郎が明治44（1911）年『秘密』大正3（1914）年『金色の死』大正9年『途上』などの探偵趣味の作品を残している。中でも、『途上』は「プロバビリティの犯罪」を扱った初めのものである。谷崎よりも少し遅れて、芥川龍之介や佐藤春夫も探偵趣味の作品を発表している。

大正6年、岡本綺堂の『半七捕物帳』シリーズが開始される。これは、江戸時代を背景にした探偵談のシリーズである捕物帳の形式を生んだ。大正9年、後にミステリ愛好家のバイブルとなる雑誌『新青年』が創刊される。大正12年、編集者森下雨村の尽力により、江戸川乱歩が処女作『二銭銅貨』を発表し、文壇にデビューした。『D坂の殺人事件』では名探偵明智小五郎を生み出し、日本のミステリ界を牽引していく。

このほか、大正末期には横溝正史、角田喜久雄、葛山二郎、甲賀三郎、小酒井不木、大下宇陀児、城昌幸、渡辺温、牧逸馬、国枝史郎、夢野久作が登場する。

昭和に入ると海野十三、浜尾四郎、大阪圭吉、小栗虫太郎、木々高太郎、久生

十蘭が登場する。

しかし、昭和13(1938)年の戦時体制下になると、探偵小説専門雑誌はすべて廃刊となり、『新青年』もミステリ色を弱めていった。乱歩でさえも書き直しや削除、絶版を余儀なくされ、探偵小説家たちは転向や休業を強いられた。



戦後 昭和20年代

戦後『新青年』は探偵小説色を薄めたままであったが、戦意高揚のための官製小説の反動で、探偵小説はがぜん脚光を浴び、『ロック』『宝石』といった探偵雑誌の発刊が相次いだ。中でも昭和21(1946)年に発刊した『宝石』には、名探偵金田一耕助のデビュー作となる横溝正史の『本陣殺人事件』が連載された。戦時下、探偵小説を発表できない中でディクソン・カーを読み、その理知的な推理と、疎開先の岡山の土俗性を融合させて、戦後の本格長編の新時代の幕開けとなる画期的作品を書き上げた。

宝石の新人募集からは、山田風太郎、島田一男、日影丈吉、土屋隆夫、中川透(鮎川哲也)、天城一がデビュー。昭和22年には戦前から純文学を書いていた坂口安吾が『日本小説』に『不連続殺人事件』の連載を始めている。

また、昭和23年には乱歩の推薦を受けた高木彬光により、名探偵・神津恭介が活躍する『刺青殺人事件』が世に出された。さらに、戦前から輸入が途絶えていた海外探偵小説は、アメリカ兵の読み捨てた小説が出回り始め、昭和24年には翻

訳権の問題もクリアされ、続々と翻訳小説が出版された。乱歩は海外作品に深い関心を示し、精力的に紹介や翻訳を精力的に行った。

昭和29年乱歩の還暦の祝いの席で江戸川乱歩賞制定が報告され、昭和32年度の初めての公募に仁木悦子『猫は知っていた』が受賞する。健康的な作風と、胸椎カリエスのため寝たきりの女性が書いたことが注目を集め、ベストセラーとなった。



企画展示 探偵小説の系譜 <日本編>

社会派ミステリ 昭和30年代- 松本清張

松本清張は、それまでも小説を書いていたが、昭和31(1956)年ごろから推理小説に意欲を燃やす。『点と線』『眼の壁』の2長編が昭和33年に刊行され、ベストセラーとなった。従来の謎解きよりも、動機を重視し、現実の社会に素材を求める作風で「社会派」と呼ばれ、水上勉、黒岩重吾、有馬頼義などを擁した。有馬頼義は昭和31年『三十六人の乗客』昭和33年『四万人の目撃者』などの長編を発表した。

都筑道夫は、戦後から様々な筆名で執筆をしていたが、昭和30年代に推理作家として本格的に再デビューした。昭和39年には中井英夫（発表当時は塔晶夫）が三大奇書に数えられる『虚無への供物』を発表している。

昭和40年代には、西村京太郎、斎藤栄、森村誠一、夏樹静子などが、社会派と古典的トリックを融合させた作風を打ち出した。西村京太郎は社会派的な作風から変化していき、昭和53年十津川警部ものの『寝台特急殺人事件』が国鉄のキャンペーンや、鉄道ファンによるブルートレイン・ブームに後押しされベストセ

ラーとなり、「トラベル・ミステリ」ブームへと続いていった。

昭和51年に『幽霊列車』でデビューした赤川次郎は、「三毛猫ホームズ」「三姉妹探偵団」などのシリーズを書き分け、10数年にわたって文壇長者番付の首位を独占した。さらに昭和55年『死者の木霊』でデビューした内田康夫は、浅見光彦シリーズで人気を不動のものとした。



企画展示 探偵小説の系譜 <日本編>

本格の復権 不遇の時代～新本格派

社会派ミステリが失速してきたころ、昭和40年代後半に角川映画などによる横溝正史ブームが再燃する。昭和50（1975）年、探偵小説専門誌として『幻影城』が創刊され、新人賞から、泡坂妻夫、栗本薫、連城三紀彦、竹本健治がデビューした。同じ頃、乱歩賞や、角川小説賞などからは島田荘司、笠井潔、岡嶋二人、東野圭吾がデビューしている。

昭和62年『十角館の殺人』の綾辻行人のデビューが、「新本格派」の嚆矢とされている。「新本格派」は稚気を忘れかけた社会派ミステリへのアンチ・テーゼとして、謎解き、トリック、頭脳派名探偵の活躍などを主眼とする本格探偵小説の復興運動であった。「名探偵、大邸宅、怪しげな住民たち、血みどろの惨劇、不可能犯罪、破天荒な大トリック」といった本格的ルールにのっとり、主に島田荘司の推薦を受けてデビューした大学推理小説研究会出身者を中心とする。折原一、歌野晶午、法月綸太郎、有栖川有栖、我孫子武丸、山口雅也、芦辺拓、麻耶雄嵩、司凍季、二階堂黎人などが挙げられる。

しかし、この中にも大邸宅、血濡れの死体などのゴシック小説的道具立てが登場しない「日常の謎」と呼ばれる流れもある。魅力的な謎と論理的な解決があれば、血なまぐさい殺人は必要としない。北村薫の円紫シリーズ、若竹七海『僕のミステリな日常』（平成3(1991)年）、加納朋子『ななつのこ』（平成4年）、倉知淳『日曜の夜は出たくない』（平成6年）などが挙げられる。



企画展示 探偵小説の系譜 <日本編>

夢野久作書簡

平成23（2011）年、成蹊大学は森家所蔵の「夢野久作・杉山茂丸関係書簡一括」を購入した。浜田雄介教授と院生が、書簡の整理と解読を進めている。現在のところ、夢野久作の父杉山茂丸の書簡が120-130通ほど、夢野久作の書簡は葉書を含め30通が確認されている。この書簡の多くは、久作をめぐる第一次資料の少ない大正6-8（1917-19）年という時期のものであり、久作を理解する上で重要な資料といえる。

今回は、夢野久作（本名杉山泰道）が異母妹の森あや及びその家族に宛てた手紙を紹介する。父茂丸は政界の黒幕として知られ、久作の実母ホトリや養母幾茂の他にも何人かの女性がいた。そのうちの一人が、森まつであり、茂丸とまつとの間に生まれたのがあやであった。あやは母まつとともに祖父森武八の家で育つが、大正4年12月にまつを病気で喪う。そのおよそ一年後に、夢野久作とあやとの文通が始まる。大正7年には武八も喪い、まつの子の森梅松の庇護下に置かれた。やがてあやは渡辺安雄と結婚、一旦は渡辺姓となるが、後に安雄が森家の養

子となった。久作の一家とあやの一家は、以降も家族ぐるみでの交際が続いた。今回は、あやの結婚、出産にまつわる書簡を中心に紹介する。兄としての優しい心遣いが感じられ、作家夢野久作とはまた違った一面を見ることができる。

参考文献

浜田雄介「森あや宛て夢野久作書簡を読む」『民ヲ親ニス：「夢野久作と杉山3代研究会」会報』創刊号 2013.9

浜田雄介「成蹊大学図書館所蔵夢野久作書簡翻刻」『成蹊國文』第46号 2013